

日本作業療法士協会 海外研修助成制度

実績報告書

学 会 名 : WFOT Congress 2026

演 題 名 : A Narrative Review of Perceptions and Values in the Continuous
Employment for People with Acquired Brain Injury

会 期 : 2026 年 2 月 9 日～12 日

開 催 地 : バンコク、タイ

氏 名 : 扇 浩幸

所属士会 : 東京都

1. 発表演題の概要

【背景】2006 年度より都道府県ごとに高次脳機能障害支援拠点が整備されたことで、高次脳機能障害者支援が進展してきた。それに伴い就労している高次脳機能障害者（以下、「当事者」）は着実に増加している。安定した雇用の継続は高次脳機能障害者の就労支援において課題の一つである。頭部外傷後の高次脳機能障害を対象とした全国調査では、受傷 5 年後に「仕事を続けている者」はわずか 15.9%だった。退職理由として、「適切な判断が困難」「対人関係のトラブル」など職務以外のソフトスキルの問題が理由に挙げられた。これらの課題は当事者だけでなく、当事者を雇用している企業の直属の上司や同僚（以下、「雇用者」）、就労定着支援機関の職員（以下、「支援者」）の認識にも影響を受けることが考えられる。しかし、当事者、雇用者、支援者三者における認識や価値観の共通点や差異を分析した研究は、まだ見当たらない。

【目的】本研究は、後天性脳損傷者の就労継続における認識や価値観に関する既存の研究を整理し、今後の支援の方向性を明らかにすることを目的とした。

【方法】後天性脳損傷者を対象に就労継続に関する認識や価値観に関連する文献を検索しナラティブレビューを実施した。適格基準を設定し、当事者、支援者、雇用者の視点に分け関連文献の抽出・分析を行った。

【結果】邦語論文 12 件、英語論文 420 件が該当した。英語論文についてはさらに、本文アクセスができ、障害者権利条約が採択された 2006 年以降に絞ったところ、96 件が該当した。ここから適格基準を満たした論文（邦語論文 3 件、英語論文 4 件）に手検索で該当した 5 件を加え、全 12 件の論文を採用した。それらを整理した結果、当事者は、仕事において様々な経験をしながら「はたらく喜び」や「障害と付き合いながら行う仕事」を見出していた。支援者は、適時適切な状況で当事者の情報収集行動を支援し、企業と情報共有する必要性が指摘された。雇用者は、当事者の特性の理解しづらさから対応に難しさを感じており、外部支援の重要性が示された。

【結論】後天性脳損傷者の就労継続には当事者、支援者、雇用者それぞれの視点を考慮した包括的な支援が求められることが示唆された。今後は各視点に基づいた具体的な介入方法や支援モデルの確立が求められる。

2. 学会参加と発表の印象

1) はじめに：初の海外発表と到達目標

2026年2月、タイ・バンコクにて開催された WFOT（世界作業療法士連盟）大会に参加し、ポスター発表を行ってまいりました。国際学会での発表は2024年のAPOTC（アジア太平洋作業療法学会）以来2回目となりますが、国外に赴き発表を行うのは今回が初めての経験でした。出発前は言語の壁や見知らぬ土地での発表への不安から非常に緊張していましたが、日本作業療法士協会のLINEオープンチャットを通じて、現地の状況や国際学会特有のシステムなど詳細な情報を事前に収集できたおかげで、渡航に対する不安は大きく軽減されました。

今回の学会参加にあたり、私は以下の3つを到達目標として設定して臨みました。

- i. 他国における後天性脳損傷者の就労支援の実践や制度に触れ、比較を通じた日本の支援体制の見直し
 - ii. 参加者との議論を通じた、当事者・支援者・雇用主の三者視点を踏まえた就労継続支援モデル構築に向けた意見交換
 - iii. 英語による発表と対話を通じた、自身の発信力と国際学会における研究遂行力の向上
- 本報告では、これらの目標に対する達成度と直面した課題を中心に総括します。

2) 目標 i について：他国の実践から得た「社会参加」の世界的潮流

自身の発表以外の時間は学会アプリを活用し、事前に「職業リハビリテーション」や「社会参加」といった関心の高いキーワードを検索して、関連するセッションを中心に聴講しました。ここでの最大の成果は、テクノロジーの恩恵を最大限に活用できたことです。Google レンズによるスライドの即時翻訳や、同時通訳アプリを駆使することで、他国の複雑な実践の概要を的確に把握することができました。

諸外国の発表から得られたのは、「社会参加」の推進において作業療法士に期待される役割が世界的に極めて大きくなっているという点です。国や文化、法制度は異なっていますが、対象者にとって「意味のある作業」に焦点を当て、環境との適合を図りながら就労を含めた社会参加を多角的に推進していくという根底の理念は世界共通でした。この視点を得られたことで、日本の支援体制を相対的に見直し、地域社会との結びつきをより強化していく必要があるという重要な視点を得ることができました。

3) 目標 ii について：e-Poster 形式での議論の限界

一方で、参加者との活発な意見交換を期待して臨んだポスター発表では、想定外の事態に直面しました。会場でのポスター発表は e-Poster 形式であることは把握していました

が、現地に設置されていたのは想像以上に小さなモニターにデータが映し出されるだけのものでした。また、自分自身で検索をしないと自身の発表が出てこないため、自分の発表を映し出し、記念撮影をするくらいしかできませんでした。国際学会の広大な会場で、大きなパネルを前に世界中の研究者・実践者とディスカッションを交わすことを想像していたため、正直残念な面でもありました。そのため、目標として掲げていた「モデル構築に向けた深い国際的な意見交換」という点については、十分な対話の時間を確保できず、達成が不十分となりました。しかし、議事の合間にあった Refreshment break という時間ではコーヒーを飲みながら、交流する時間が設けられており、研究について説明する機会は得られました。同じ課題意識を持った人と出会うまでは至りませんでした。さまざまな国の作業療法士と交流をもてたことは、今後の糧になりました。

4) 目標 iii について：英語での発信力と今後の課題

英語による発信力と対話力については、明確な課題が残りました。自身の英語への苦手意識もあり、前述の翻訳アプリなどのテクノロジーに大きく依存する結果となりました。ツールを介することで、発言の意図を汲み取り、セッション等を聞き受身的に学ぶことはできたものの、その場で湧き上がった疑問やアイデアを質問し合うような自発的で深い対話には至りませんでした。国際学会における研究遂行力を高めるためには、テクノロジーを活用しつつも、自身の語学力を底上げし、自身の言葉で直接熱量を伝える力を養う必要があると痛感しました。

5) おわりに：今後の実践への還元

全体を通して、自身の語学力や議論の展開力といった課題が浮き彫りになった一方で、世界の作業療法士が対象者の社会参加に向けて情熱を注いでいる姿に直接触れられたことは、何にも代えがたい経験となりました。まだ帰国直後であり、得られた膨大な情報を整理する時間は取れていませんが、本大会で得た包括的な視点や他国のアプローチは、現在準備を進めている就労選択支援事業をはじめ、日々の実践に直結するものです。また、実践だけでなく研究をする立場としても、この国際的な知見を具体的なリサーチクエスチョンへと落とし込み、現場の支援モデルの質を向上させるべく、さらなる研鑽を積んでまいります。

3. 文献

4. 論文掲載情報（学術雑誌に投稿し、論文掲載された場合に記載）